

特集 生徒の発話を促すために

生徒の発話を促す 教師からの働きかけ

高梨庸雄

(京都ノートルダム女子大学)

1. 似て非なる発話

パターン・プラクティスの全盛時代、教師のキュー(cue)に従って流れるように展開した公開授業があった。授業が終わってから、参観していた Native speaker が生徒に簡単な質問をした。しかし、生徒から帰ってきたのは沈黙だけであった。不思議に思い、授業をした教師に会って事情を説明し、その理由を聞いてみたら、教師からも発話らしい発話が出てこなかったという。

このエピソードは、その教師を責めるために引用したのではない。英語が義務教育の科目になったのは、戦後、新制中学ができてからのことであり(最初の Course of Study は 1947 年)、教師不足で、かなりの期間、“無免許運転”(英語教員免許状を持たない教師の授業)が全国的に行われていた。そのような時代に広まったのが Oral Approach (より一般的には Audio-Lingual Method) であり、「英語を話せなくても英語が教えられる」というのが、その指導法の日本におけるキャッチ・フレーズであったから、その頃ならあり得た話である。

これはコミュニケーションを考えると、今でも通用する教訓を含んでいる。それは、流れるように進んだ授業であっても、英語の表面的な形の繰り返しだけでは(文型練習がどんなにスムーズに運んでも)、コミュニケーションにはならないということである。これは今では英語教師なら誰でも知っていることであるが、それでは生徒の発話を促すにはどうしたらよいのだろうか。

2. Text-based utterances

これは教科書を中心に生徒から発話を引き出す場

合である。英語の授業における Q & A の多くはこのタイプである。これには大別して 3 種類ある。1 つはテキストに書かれている内容の事実関係を問うもの (fact-finding) である。次の文章をもとに考えてみよう。

Hello, everyone. Personally, I had an interesting experience here in Japan. Let me tell you about it.

I came to Japan as an ALT last July. My base school was in a seaside town in the northern part of Japan. One morning in September while I was talking with a Japanese teacher of English in the teachers' room, I sneezed violently. However, none of my Japanese colleagues said "Bless you!" I was rather surprised.

(Orbit English Reading, 三省堂)

多くの教師は次のような質問をするだろう。

- 1) When did the ALT come to Japan?
- 2) Where was his base school?
- 3) What was he doing with a Japanese teacher of English one morning in September?
- 4) What did he do violently?
- 5) Did his colleagues say something?

これらの質問は、すべてテキストに書いてある facts についての質問である。内容がわかっているなら誰でも答えられるので「目の検査」と揶揄されることもある。しかし、実際の教室では、その「目の検査」で目が悪くないのに答えられない生徒もかなりいるのも「事実」である。そこで Gurrey (1970) という先生は、① 文字で表現されている内容を正確に把握させたり、② 質疑応答という形で文型練習を兼ねたり、③ 生徒がいつも正しい form で練習ができるようにするために、この種の質問が必要なのだと言っている。

しかし、質問がすべて事実関係についてであれば、

内容がわかっている生徒には退屈であろう。そこで次の質問をしたらどうだろう。

Why was he rather surprised?

この質問で、少しオーバーヴァーに言えば、異文化理解への扉を開くことになる。Bless you! は (May) God bless you! から派生したものであり、西洋ではくしゃみが不吉なものとされてきた名残である。生徒には日本でくしゃみをしたとき何と言うか (What do you say when you sneezed?) と聞いて、Someone must be talking (gossiping) about me. などと言いながら、生徒から発話を引き出して、しばし緊張をほぐすひとときにするのもよいであろう。

では、次の短い対話は どうだろうか？

Teacher: How old are you, John?

John: I'm six at home and at school. But I'm five on the train. (前掲書)

これはあまり教育的な内容ではないが、Take a rest. というページにある Jokes の 1 つであるからご寛容を願いたい。このジョークが成り立っているのは、John の発話にある 2 つの文の関係が読者の心に浮かび上がらせる inferential meaning (推測的な意味) である。Why is John five on the train? と質問して、生徒から He travels (at) half fare. という発話を引き出したい。

3. Content-based utterances

Content-based instruction (以後 CBI と略す) という指導法があって、これは本来、英語圏に移住した家族の子どもが、早く通常の授業を受けるクラス (mainstream という) に入ることができるよう、content areas (数学、理科、社会などのような内容中心の教科) で必要な語彙やスキルを英語の授業で教えるものである。日本では小学校の英語の授業を CBI で行っている人たちや SELHi (Super English Language High School) で類似の授業を模索している人たちがいる。指導の発想は CBI と似ているが、CBI をメインにしていない英語の授業でも、もっと教科書の題材内容を広げたり深めたりするために英語で Q & A を多くすると content-based utterances が多くなる。

次の段落をもとに応用例を考えてみよう。

A Canadian couple took a trip to Japan. They had studied Japanese in Canada before starting on their trip. On their first night in Tokyo, they went to a *sushi* shop. When they finished eating, the husband tried to use Japanese and asked, "*Ikura?*" meaning "How much is it?" The cook at the counter shouted loudly, "*Ikura for two!*" Beautiful *ikura-zushi* was immediately placed in front of the amazed Canadians. The man was disappointed. He changed from Japanese to English, and again asked for their bill, "How much?" Do you think they got the bill? No. This time they got *hamachi-zushi*. (前掲書)

テーマは Confusion between Languages である。もちろん、ジョーク仕立てになっている。このテーマを英語で話し合うのは大学生でも難しいが、「食事」という content area での Q & A であれば、それぞれの学習レベルに応じて可能である。最初、ALT との対話形式でモデルを示す。

JTE: Have you tried Japanese food?

ALT: Yes. I had *sukiyaki*, *sushi* and *tempura*.

JTE: Oh, did you? Which do you like best?

ALT: I like *sukiyaki* best, but *sushi* and *tempura* are also good.

ALT: Have you ever been to a Chinese, French or Italian restaurant?

S1: I went to an Italian restaurant with my father.

ALT: Oh, you did. What did you take there?

S1: (I took) spaghetti.

ALT: What kind of spaghetti did you take?

S1: Spaghetti with meat sauce.

ALT: That's my favorite, too.

4. Student-based utterances

これは授業中、生徒の情意領域や生徒の視点からの題材理解を中心とする発話である。Q & A では、テキストの事実関係把握が主になりがちであるが、それは必然的に生徒の答えが正しいか間違っているかという視点で評価される。そのため、生徒の中には間違ふことを恐れて発言にブレーキがかかってしまう者も少なくない。生徒の受け取り方に一歩踏み込んで、事実関係ではなく「あなたはどう思うか (考えるか)」という問いを投げかけて、生徒の視点からの発話を引き出す場合が Student-based utterances である。次の文章に基づきシミュレーションをやってみよう。

これは 2050 年までに世界の人口が 10 billion になると予測されるが、食料生産は大丈夫だろうか、

というテーマでのディスカッションである。

RAJA: I'm just glad I won't be living then! I think tens of millions of people will starve to death. People will probably have to eat things that we don't normally eat today. People are already starving all over the world. The situation will only get worse. (前掲書)

ここまでの発言内容に関して、生徒から賛否両論の意見を自由に発言させる。クラスによっては発言が活発でない場合もあるだろうが、その場合は長い目で考えて日本語で意見を出させて、その後で Writing の活動にして班ごとに意見をまとめさせ、最後に班の代表がレポートする、という展開にしてもよい。

5. 生徒の発話を促す発問

発問の種類はたくさんある。その中から生徒の発話を促す発問を選んでみよう。

1) Open question

これは回答が複数にあり得るような発問である。もし What was the political system in China in 1960's? と聞けば、communist country あるいは system based on communism という同じ趣旨の回答しかあり得ないが、What political system do you like? と聞けば、人によっていろいろな回答があるだろう。前者は Closed question、後者は Open question である。

2) Creative question

これは答えを出すためには、今聞いたり読んだりした情報を十分消化して、自分の考えをつくる必要があるような発問である。例えば次の文章を読んだと仮定しよう。

A forest ranger was sleeping in his tent one night when something touched his lips softly. Smiling in his sleep, he brushed it aside. The caress was repeated. It felt cold and a bit prickly. The ranger opened his eyes in pitch-darkness. Reaching for his flashlight, he flooded the tent with light. There, looking wistfully down on him, were two mountain lions!

No one will ever know who got out of the tent first, the lions or the ranger—but the ranger kept on going. (小学生用リーディング・テキスト〈米国〉)

まず、What made the ranger wake up? と質問した場合、mountain lions (puma, cougar とも言う)

と答えることは可能だが、それは段落の終わりのほうでわかることである。森林警備隊が眠っていたことを考えれば Something touching him. と答えるほうがサスペンスがあって面白い。さらに What felt prickly? と質問すれば、2匹同時に触るということは想像し難いので A lion. という答えで十分であろう。そして、Why did the ranger run away? に答えるためには、少し‘創造的’な想像が必要である。

3) Opening question

1) の Open question と違って、これは教師が生徒と対話を始めるきっかけを作るための発問で、情意的な意図から出る場合が多い。

例) How is it going, Naomi?

What are you going to do in summer vacation?

4) Clarifying question

本来の意図は、相手の話に感じた疑問点を質問してはっきりさせることであるが、結果的に生徒に考えさせ、生徒からより具体的な(あるいは正確な)発話を引き出すことにつながる。

例) Can you give us some examples?

Am I right in thinking ...?

5) Elicitation question

予想に反して生徒から発話がうまく出てこない場合に、発話の出だしにヒントを入れたり、イントネーションで生徒にわからせたりすることである。一種の誘導尋問であるから、できれば避けたいが、このようにしないとなかなか口を開かない生徒もいる。

例) What he said was ...?

His real intention was to ...?

She worked very hard in order to ...?

さいごに

生徒の発話を促すには、個々の生徒の能力や特質に合った質問の仕方を工夫することと、発話の後に回答をせつつかないことである。教師は、洋の東西を問わず、生徒に質問してから、待つのが苦手のようなのである。授業中の沈黙を教師は無意識に恐れているのかもしれない。アメリカの小学校教師も、質問してからの平均待ち時間は3.7秒である。もう1秒多く待ってあげれば、生徒の回答数はかなり違うはずである。